

空の先駆者



「飛行士になりたい」。大空にあこがれ、航空雑誌を愛読していた大場辰男氏は、苦学の末に夢を実現。奥能登初のパイロットが誕生した。



航空隊入隊当時の大場辰男氏＝当時の新聞記事から

大場辰男氏は、明治37年3月13日に珠洲郡木郎村字秋吉（現能登町字秋吉）に生まれた。決して恵まれた家庭ではなく、母親が17歳、父親が19歳の時に亡くなった。辰男氏の最大の理解者であった兄康太郎氏は、訪問飛行前日の新聞インタビューで次のように振り返っている。

「弟は小学校時代から飛行家を熱望していたもので、わずかな収入から航空機に関する書籍雑誌を取り寄せ、仕事の暇を盗

んで熟読し、併せて英語の方もやっていました」

16歳で秋吉出身の実業家背戸栄吉氏を頼って上京。牛乳配達をしながら勉学に励んだという。「苦学のうちに、最初の目的をあくまで断念せず、その後関東大震災で一時帰省していましたが、半日は家の手助け、半日は勉強という訳で、早朝から体育の訓練に努めるなど、航空隊の入隊試験準備に熱中し、時々村の人を驚かすありさまでした（康太郎氏）」。

大正12年11月、2回目の航空隊入隊試験受験のため、再び上京。「今度失敗したら英語の通訳になる」と康太郎氏に話して

出発したという。辰男氏は、狭き門を見事に突破。奥能登初のパイロットが誕生した。

「空はなんと寒いんだろう」

初めて乗った飛行機で辰男氏はこう思ったという。

その後海軍を除隊し、安藤飛行機研究所の操縦教官となった辰男氏は大正14年10月、関西水上飛行大会で2等となり、郷土訪問飛行を熱望する。

郡役所の知人を通じて地元の協力を依頼すると、地元は大歓迎の意向を示した。こうして石川県人初となる郷土訪問飛行が実現することになった。

秋吉尋常小学校新築当時（大正14年）から、秋吉公民館へと84年もの年月を飾り継がれた一枚の絵。この絵をめぐる会話から、大場飛行士の偉業を後世に残そうと、世代間交流学級が生まれました。

仲間がそれぞれに項目を掲げて調べを進め、一年を費やして編集した資料が「郷土の先人 大場飛行士と郷土訪問飛行」です。

資料編集の最大よりどころは、当時の新聞報道でした。大場飛行士の同級生である故坂本新左エ門氏が親友の活躍を告げる新聞紙をスクラップブックにして大切に収集・保存されていたのです。

また、当時小学生で実際に



『郷土の先人 大場飛行士と郷土訪問飛行』平成12年3月1日町立秋吉公民館発行／世代間交流学生編集

飛来する飛行機を目の当たりにした皆さんからも思い出話を伺いました。

編集を通して、わが公民館下に生まれた青年の偉業が、絵でしか飛行機を知らない当時の人々にとっては驚きの一言に尽きることであり、現代の宇宙飛行に匹敵する、すばらしい快挙であったと感じていました。



秋吉公民館世代間交流学級 学級長 背戸 清さん（秋吉）

特集 空

大場辰男物語

秋吉公民館に、大正、昭和、平成と受け継がれてきた一枚の絵がある。作者は恋路の洋画家坂寛二氏（坂坦道氏の父）。その絵には、恋路海岸の上空を飛ぶ飛行機の機影が小さく描かれている。

平成10年10月、一人の古老がこの絵について語った。奥能登初のパイロット、大場辰男氏の郷土訪問飛行。その一幕を伝える大切な絵だということを一。



11月18日、松波海岸着水地で秋吉地区の皆さんと記念撮影。この写真は秋吉全世帯に配付された。後、11月1日、松波海岸の橋は2枚の写りが確認できる。



飯田棧橋で花束を受け取る大場飛行士（左）
=当時の新聞記事から

と旋回した。群衆は手旗を振り「バンザイ、バンザイ」と連呼して大場氏に声援を送った。

郡をあげての歓迎

午前11時30分、飛行機は見附島上空から着水予定地の飯田町に迫った。そして、飯田町上空で大きく旋回し、熱狂する群衆の「バンザイ、バンザイ」という歓呼の中、鮮やかに着水した。大場氏は元気旺盛で、「バンザイ」を浴びながら陸上の人となった。

午後1時からは、格納庫で歓迎会が行われた。会場では、500人余りの出席者が一斉に杯をあげて成功を祝い、数万人の観衆は、歓迎会場と機体の周囲を埋め尽くしていた。

「熱烈なる歓迎を賜ったご厚意にはただ感謝のほかはない。(中略) 機上から見た宝立村の山々は高く、屹立して見えまして。大場氏は、安藤飛行場から飯田町までの全行程235マイル(約378km)の難航路を複製機式水上飛行機で一気に制覇した。

古里木郎村へ

翌18日午前、飯田町の森下旅館で一夜を明かした大場氏は、長坂機関土と共に機体の点検を終え、松波へ向けて離水した。飯田町上空では20分の低空で旋回。機上からピラを散布し、蛸島から三崎方面に向かった。大場機は、若山、宝立、木郎、小木の上空を経て、午前10時に

大正14年11月17日、大場辰男飛行士は、郷土訪問飛行を決行した。石川県航空史にその名を刻んだ郷土訪問飛行をたどる。

錦を飾った訪問飛行

特集 空

飛行機が来るぞ

「天気晴朗せひたて」
大正14年11月17日未明、安藤飛行場(愛知県)の大場氏あてに電報が発せられた。

この電文に対し、安藤飛行場から「大場君は午前8時5分についた。名古屋密雲深し」という電報が入る。この電文に郡当局と飯田町は歓喜にあふれた。「飛行機が来るぞ、大場が来るぞ」

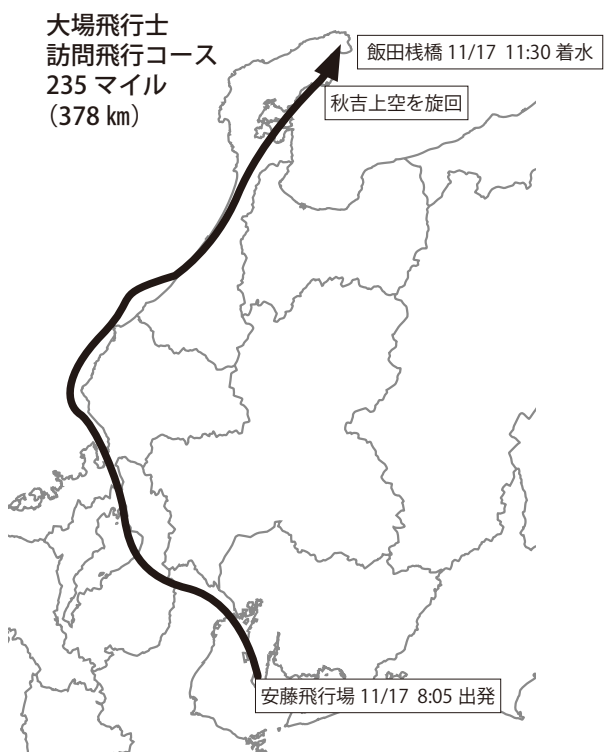
着水予定地の飯田棧橋付近には数万人の群衆が殺到し、新しい情報を心待ちにしていた。

「大場氏大聖寺通過」
午前10時10分に報告された情報に、群衆の歓迎気分はますます高まった。

秋吉上空で旋回

大場氏の古里秋吉では、老若男女が集まり、「バンザイ大場」とムシロ文字を作って郷土の英雄を待ちわびていた。

そこに、河ヶ谷方面から「爆音」が聞こえてきた。大場機は、真つ先に先祖が眠る墓の上空を旋回し、群衆が待つ大島の上空では特に低空飛行で2回、3回



松波海岸に着水した。「バンザイ、バンザイ」

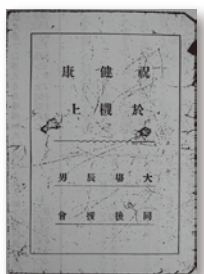
松波海岸に集まった4千人以上の観客は、歓喜と感激の頂点に達していた。

歓迎会は400人余りが出席し盛大に催された。歓迎会では、郷土に錦を飾った大場飛行士に心からの「バンザイ」を三唱したという。

大場氏はこの日秋吉に入り、秋吉尋常小学校で地元の人から歓迎を受け、自宅に帰って一泊した。

各地を巡り無事帰還

19日、3千人が迎える飯田町に再び着水し、七尾へ向かった。



機上からまかれたピラ

翌20日は天候不良のため、七尾で講演会を行い、21日に河北潟へ。粟崎遊園地で長石川県知事らから大歓迎を受けた。郷土訪問飛行最終日となった22日、金沢市上空で大きく円を描いて低空飛行を行い、ピラを散布。そのまま日本海岸線をたどって琵琶湖を横断し、安藤飛行場へ帰還した。

石川県航空史に大きな1ページを刻んだ大場飛行士の郷土訪問飛行は、大成功で終わった。

大場辰男氏のあゆみ

- 明治37 3月13日 珠洲郡木郎村字秋吉(現能登町字秋吉)に大場家二男として生まれる。(父・熊蔵、母・と)
- 大正5 秋吉尋常小学校卒業
- 大正8 松波尋常高等小学校卒業
- 大正9 専修商業学校(東京都神田)夜間部入学
- 大正10 航空隊入学試験受験(失敗)
- 大正12 関東大震災で帰郷
- 大正13 航空隊入学試験合格
- 1月、第二回航空局依託練習生として横須賀追浜海軍航空隊に入隊
- 5月、特待生となる
- 海軍大演習に参加
- 9月、二等飛行機操縦士合格。横須賀航空隊依託練習生卒業。海軍三等兵曹 海軍二等飛行機操縦士に
- 海軍除隊 安藤孝三飛行機研究所の操縦教官に
- 10月4日、帝国飛行協会主催の関西水上飛行大会に出場、二等に入賞し、賞金2500円を得る(当時家一軒が約800円)
- 11月8日、秋吉の坂本新左衛門宅で二等入賞祝賀会。郷土訪問飛行を決意し郡役所に地元の協力を依頼
- 11月17日、郷土訪問飛行機種・複製機式口号甲型イスパノ・スイザ200馬力水上偵察機
- 8:05 安藤飛行場(新舞子)を出発
- 11:30 秋吉上空を旋回後、飯田棧橋近くの水面に着水
- 11月18日 9:00 飯田海岸を離水
- 10:00 松波海岸へ着水
- 11月19日 9:00 松波海岸を離水
- 14:00 飯田海岸を離水
- 14:46 七尾港に着水
- 11月20日 豪雨で飛行中止
- 10:00 七尾女児校で講演
- 11月21日午前、七尾上空でピラ6万枚を散布
- 9:00 河北潟を離水
- 12:15 七尾港を出発
- 12:55 河北潟に着水
- 11月22日 9:00 河北潟を離水
- 金沢上空でピラを散布し、帰還飛行へ
- 11:00 安藤飛行場着陸
- 9月、名古屋―新宮(和歌山県)間の試験的定期航空(郵便飛行)の機長に昇格
- 10月、一等飛行機操縦士に昇格
- 航空免状(第36号)交付
- 秋、安藤飛行機研究所退所
- 秋吉に帰郷
- 第2回内浦町条列表彰
- (松寿園(小松市)に入院
- 10月26日、94歳の生涯を閉じる